

## 第9章 社会学の研究例

社会学についても私は専門ではありません。そこで、今回は、大塚久雄による「社会科学の方法」という著作を中心にお話ししたいと思います。ご紹介する研究者は、主にマックス・ヴェーバーです。カール・マルクスにも少し登場してもらいます。

あらかじめお断りしたいのは、マルクスもヴェーバーも、それぞれ沢山の研究業績を残した研究者で、私のような素人が、お話するためには、その膨大な文献をある程度読むべきです。ところが、それが現状ではできていないので、大塚久雄に登場してもらいます。ところが、大塚久雄自身も、日本を代表する歴史経済学者であり、その著作も沢山あります。

できるだけ丁寧に扱い、私なりの観点からお話ししたいと思います。しかし、こうした事情から、絶対的な勉強量が専門家よりもずっと少なく、残念ながら誤解や間違いがあるかもしれません。学生の皆さんからも問題点や疑問を沢山指摘してもらえたらと思います。

### 9.1 はじめに—問題点

前回、行動経済学のお話をしました。印象として、実験は沢山しているものの、これまでお話ししてきた科学のABCとは、やや感じが違うように思ったのではないのでしょうか。そこで、今日のテーマの一つめは、

- 1) 社会科学(いわゆる文系分野)の研究と、自然科学の研究は、同じように科学のABCが適用できる実験で確かめることができるのか。

です。

この点については、後でも述べるように見解が分かれるところです。しかし、ある基準を設けて、実験科学を2つのグループに分けることができるようにも思います。そこで、2つめのテーマは、

- 2) 社会科学を念頭に置いたとき、実験科学はどのように分類されるのか。

です。

こうした題材を扱うのに、マックス・ヴェーバー(1864-1920)が書いた著名な論文「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」を扱って考えます。この論文は、資本主義とキリスト教について扱ったものです。この論文が成立する前提知識が私たちには欠けていると思われるので、問題設定を東洋人(日本人)ばく変えてお示ししましょう。

- 3) 資本主義的な金儲けって、キリスト教の立場からしてアリなのか。

です。資本主義に基づく経済活動は、世界中に広まっています。時には、それはかなり露骨な金儲けとして私たちの目に映ります。一方で、資本主義が誕生したヨーロッパでは、キリスト教が広く流布しています。キリスト教は、そのような露骨な金儲けを許すような宗教なのでしょうか。

## 9.2 プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神

マックス・ヴェーバー (1864-1920) は、社会学と呼ばれる学問分野で重要な仕事をした人です。そして、その中でも、著書「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」は、広く読まれています。この本の趣旨は、後ほど述べるとして、とりあえず、本書を開いて、この講義で勉強している科学の ABC の観点に沿うような記述があるかどうかを検討してます。

すると、科学の ABC で語れるような内容がいくつもあることに気づきます。例えば、次のような内容です。

A 近代的な企業では、プロテスタント (P) の方がカトリック教徒 (C) よりも所得が多いのはなぜか？

B 国によって P と C の比率が大きく異なる。信仰の種類の違いというよりは、民族や文化の発展程度が違うのである。

C 同じ国の中で、P と C の所得の平均値を比べてみる。平均値がさほど異ならなければ、仮説は支持される。

実際に、この著書の中では、ドイツのバーデンで、1885 年のデータが掲載されています。「資本収益税の課税対象になる資本額」についてのデータですが、ざっくり、金持ちの度合いと考えていいでしょう。どうやら、1つの国の中でも、P と C で金持ちの度合いが異なるようです。それでは、

信仰の種類	資本額
P 1000 人	954,060 マルク
C 1000 人	589,000 マルク

表 9.1: 1000 人の資本額 (バーデン、単位は%)

どうして、このような違いが生じたのでしょうか。これも ABC に対応したような記述が見られます。

A どうして、P の方が C よりも金持ちなのか。

B 親が子供にする教育が異なるからである。

C 信仰の種類毎に各種学校の進学率を比べてみる。P の方が実務系の学校への進学率が高ければ、仮説は支持される。

次のようなデータが示されました。実業高等学校の数字が誤っているような気もしますが、テキストのまま掲載します。これを見ると、人口の割合に比べて、P の方が高等教育機関の、特に実業的

学校の種類 \ 信仰の種類	P	C	ユダヤ人
高等学校	43	46	9.5
実業高等学校	69	31	9
高等実業学校	52	41	7
実業学校	49	40	11
高等小学校	51	37	12
人口の割合	37	61	1.5

表 9.2: 高等教育機関での信仰の種類 (バーデン、単位は%)

な学校に進学している割合が高いとわかります。しかし、これは根本的な解決にはなっておらず、それでは、なぜ、親は子供にそのような教育をしようとするのでしょうか、

この点について、ヴェーバーは次のようなことを述べています。

カトリシズムが「非現世的」だとか、プロテスタンティズムが唯物主義的な「現世のたのしみ」をふくんでいるとか、その他の様々な漠然とした観念によっては、とうていこの問題を解くことはできない。

そんな大雑把な印象だけで判断するのは止めて、もっと丁寧に論証しなければなりません、と述べています。

最終的な結論については、キリスト教の歴史や、宗派による考え方の違いに足を踏み入れなければ解説できませんので、ここでは詳しく触れません。興味がある人は、ぜひ、自分で読んでみてください。ただ、ここで指摘したいのは、ヴェーバーが丁寧に ABC に対応したような議論の仕方を積み重ねている点です。私たちがこれまで勉強してきた ABC と同様に考えて良さそうにも思います。

ちなみに、結論の一部を書くと、プロテスタントの、中でもピューリタンと呼ばれる宗派は、禁欲のために働き、なおかつ、禁欲的であるので、お金を使わなかったために、資本（お金）がたまり、資本主義に合致した経済活動に好適だったので、資本主義がより進展したと考えられる、ということです。

## 9.3 社会科学の方法

それでは、社会学を含む社会科学でも、自然科学と同じような方法を展開することが可能でしょうか。社会科学が自然科学と最も異なるのは、社会科学が研究対象とするものには、人間活動が含まれているという点です。人間活動が入ってくるようなものを、科学として扱うことができるのでしょうか。

もちろん、古くから経済学という学問がありました。しかし、経済学は人間を人間として扱っていないような側面があります。ここでは、人間活動を取り込んだ社会科学が成立するか、という観点です。

この点について、著書「社会科学の方法」の中で大塚久雄が議論を展開しています。

まず、旧来の経済学を批判したカール・マルクスについて述べています。マルクスは「資本論」（岩波文庫で9分冊）や「共産党宣言」などの著作で知られ、共産主義を掲げた人です。大塚の説明するマルクスの考え方は、大まかには次のとおりです。

自然に任せた人間活動で生じる生産物は、人間から独立してしまって、あたかも自然現象と同様になってしまう。そのために、自然に法則があるのと同じように、そこには法則性が現れる。いわば第二の自然として扱えるので、科学的認識ができるようになる。（ただし、議論を展開するとどうしても「人間」が現れる必要が出てくるところが興味深い。）

人間の経済活動については、生産物を人間から独立して考えることができるようになるので、科学として扱える、というわけです。

ヴェーバーの場合は、やや異なったやり方で社会科学を構成すると、大塚は考えています。マルクスの場合には、経済活動の上に、様々な文化的なことがらが起こるとしてはいますが、ヴェーバーの場合には、相互に関連があるとしています。つまり、文化的なことがらと、経済的なことがらが、

互いに影響を及ぼしあっていると考えます。ただ、このようにぼんやりとした記述では科学になりません。そこで、次の2つの観点で考えようというのです。一つは、マルクスや自然科学と同様に、原因と結果という関係という観点です。もう一つは、人間が目的をもって何らかの手段を選ぶ自由意志の観点です。通常、人間の自由意志が入ってくると、途端に科学として扱えないと考えがちです。しかし、ヴェーバーは、逆に、この自由意志があるからこそ、科学としてよりしっかりと成立すると考えます。なぜなら、物理法則には根拠がないのに、人間の自由意志を私たちは根拠付けて理解することができるからです。誰もが納得するような理由を見出せると考えたのです。

マルクスも、ヴェーバーも、大塚も、社会科学が科学として成立するとしています。

## 9.4 個別の科学

やや抽象的な議論になってしまいました。ここでは、もう少し別の観点から考えてみましょう。

大塚は議論の中で、気象学を例に取り出しています。社会科学と気象学は似ているというのです。そして、気象学が科学として成り立つなら、社会科学も科学として成り立つのではないかと論じています。

それは、具体的には、このようなことです。例えば、台風が関東地方に上陸したとします。このとき、どうしてそのコースが選ばれたのでしょうか。大気現象も物理現象ですから、何らかの理由があってそこを通ったはずで、近くにある高気圧の影響や、海水温、山の位置関係、などなど、様々な影響を受けてコースが決まったはずで、このように、個別の台風から法則性を導くのは難しいかもしれないけれど、法則を用いて台風を説明できる。社会科学も同様に考えることができるだろう。気象学が科学なら、社会科学も科学である、というわけです。

では、逆に、気象学は科学のABCとして考えることができるでしょうか。例えばこうです。

- A 台風がこのコースを選択したのはなぜか
- B 海面水温がちょうどこのコースを選ぶようになっていたからである。
- C 海水温だけを変えてコンピュータシミュレーションしてみる。台風のコースが変われば、仮説は支持される。

ところが、地形を変えても、まわりの気圧配置を変えても、どれを変えても台風のコースは変わるでしょう。そもそも、コンピュータシミュレーションで、現実と同じように台風が移動するか、大変疑問です。現実の台風だけを考える場合でも、気圧配置や海水温の分布が全く同じであるようなときは、まず、ありません。台風の性質については、物理法則（流体力学の法則など）を使って説明することはできるでしょう。しかし、個々の台風について何か因果関係を述べることは難しい状況があります。

社会科学も同様な側面があります。例えば、ヴェーバーは、バーデン市のデータを使って、上に議論したことを述べました。果たして、PとCの人口比率が同じ市があったとしたら、同じような分布になるでしょうか。そんなことはないでしょう。気候風土、経済の発達段階、近隣諸国との関係などなど、様々な影響を受けるでしょう。しかし、丁寧に議論すれば、何が影響しているのかを明かにできそうです。

どちらも、個別的で、どちらも、「全部が互いに関係している」で終わってしまいそうですが、丁寧にデータを扱うことで因果関係を特定することができそうです。こうした点が似ているというのが大塚の指摘です。

しかし、逆に、気象学も社会科学と同様に科学ではなく、「擬似科学」(科学のようなもの)であると考え人もいます。物理学者の池内了は、著書「疑似科学入門」で、気象学や地球温暖化論を

「第3種の疑似科学」であるとしています。気象学や地球温暖化論は、そもそも科学で扱いにくいものであり、ちょっとした変化が大きく影響することがあるので、確実なことが言えないからです。

## 9.5 反証可能か

同じ本の中で、池内は科学哲学者カール・ポパーを紹介しています。科学が有すべき要件の第一は、反証可能であるである、というのです。これは、気象学や地球温暖化論、あるいは、地球科学全般、さらに社会科学や、人間の科学にとっては、大変厳しい条件であると言えます。

例えば、地球の生命について考えましょう。人類を含む地球の生命の進化について、様々なことがわかっています。そして、因果関係として語られている部分もあります。しかし、地球とそっくりな星が、太陽の向こう側にあって、地球と一緒に太陽を回っていたとして、その星では地球と同じような生物が進化しているのでしょうか。その答えはわかりません。

その星では、日本列島ができているのでしょうか。同じような台風ができて、同じような時期に同じような場所を通るのでしょうか。

あるいは、同じ地球上で考えてみましょう。もしも台風の発生が3日ずれていたら、その台風は私たちの住んでいる場所を直撃しただろう、ということができるのでしょうか。

自衛隊があるから外国からの侵略を防げた、という人がいます。自衛隊を設立しなかったら侵略してくる国があるのでしょうか。

今朝、皆さんは何を食べてきたでしょうか。もしもパンを食べてきた人が、ご飯を食べていたら、頭の回転がよくなって、今日の授業内容がよく理解できて、テストの成績もよくなる、というようなことが言えるのでしょうか。もしも、大学の授業に参加するとき、バスに乗る前にコンビニでおにぎりを買っていたとしたら、そこで誰か素敵な人に出会っているかもしれません。そうでないと、誰が言えるのでしょうか。

どれもこれも反証不能です。1回だけの出来事であり、繰り返すことはありません。比較対象になるようなものはこの世に存在していません。

私はこれらを扱う学問をレベルの低い学問だ、とは言いません。しかし、科学のABCできちんと結論できない学問であることは指摘したいと思います。そして、そのような場合には、人間の何らかの価値判断が入りがちです。まして、自分自身の人生について考えるときは、合理的に考えることに加え、自分の価値判断に基づいて選択すること大事になってきます。

では、人がすべき選択とは何か。インド系アメリカ人で、コロンビア大学教授のシーナ・アイエンガーが行った白熱教室は、まさに選択についての話でした。これも大変興味深い内容を含んでいます。しかし、今日は時間がないので、ここまでとします。